

真木大堂

真木大堂の宝物殿にある3体の仏像は、日本の木造仏像を知る上で非常に良い例となります。この3体の仏像は全て重要文化財に指定されており、平安時代（794年～1185年）に彫刻されたものと考えられています。中央は阿弥陀如来像で、高さは216cmあり、檜の大きなパーツをいくつか合わせて作られています。如来像に貼られていた金箔のかすかな名残を、黒漆の下地に見ることができます。阿弥陀如来像は4体の武装した守護神に守られており、それぞれの像は顔をしかめた邪鬼の上に立っています。如来像の右側の像は不動明王で、珍しい立像となっています。不動明王が恐ろしい表情をしているのは、人々を怖がらせ、救いの道へ導くためです。250cm以上あるこの像は、日本で最大の木造不動です。背後は炎に包まれた聖なる鳥が彫られており、これは江戸時代（1603年から1867年）に追加されたものとされています。また、その手には無知を切り裂く剣が握られています。不動明王は、左手にある水牛の上に座っている像、大威徳明王と同様に、密教の五大明王の一員として崇められています。大威徳明王像は、その背後にある六面六臂六足という強調された身体的特徴と、実物のような水牛が対照的な像です。驚くことに、これらの素晴らしい像がどこから、そしていつもたらされたのかという決定的な記録は一切残っていません。